

脳ブームのあれこれ

前田 佳均 超極限環境下における固体の原子制御と新奇物質の探索グループ

最近、「脳を鍛える」ゲーム機ソフトがたいそう売れているらしい。また、ノーベル賞にもっとも近い脳科学者某氏が出題する「アハ体験」がテレビ番組や雑誌で盛んに紹介されている。私の場合は、その「アハ画像」を見ても大概判らず悔しい思いをする。そして誰もが心の底に秘めた自分の能力への不審や不安が浮上してくる。さらに「脳に快感アハ体験」とか言われると、リベンジとばかりにそれを注視する。そして、答えが当たると「脳が活性化した」と有頂天になる。しかし、また自らの軽率さに後悔する。まことに「脳に不快な体験」となる。

こうした方法で「脳を鍛える」などまったく行ったこともなく、それには長年の継続的学習しか思いつかない私の脳は、こうしたゲーム感覚のパルス刺激による脳鍛錬を拒絶しているようである。単なる娯楽用ゲーム機を「脳鍛錬マシン」にまで進化させた、この脳ブームは、最近の映画「そうかもしれない」、「明日の記憶」、「私の頭の中の消しゴム」（韓国）などで取り上げられている（若年性）認知症のような脳機能に関する病への潜在的な不安から引き起こされているのかもしれない。

「右脳・左脳論」は、性格判断、職業適性や占いまでも用いられている。これは左脳が言語、分析的判断や論理的思考、右脳が映像・音声的イメージや総合的な判断、芸術的創造性を担うとし、性格にこれらは反映し、例えば理屈っぽい人物（特に理系？）は左脳優位、芸術肌の人物（おおむね文系？）は右脳優位とする説である。もちろんこれは非科学的俗説であるとされている。一般的な紹介によると、「指を組んだとき右親指が自然と上になる人は情報の理解を左脳で行っている」、「腕を組んだとき右腕が自然と上になる人は情報の表現を左脳で行っている」らしい。当然、4つのパターンが生まれる。私の場合は「右指上・右腕上」で、「情報を論理的にとらえて論理的に伝えるので、本人もまわりのひとも、ものごとを的確に理解できる」らしい。偶然とはいえ、これは研究者には必須の能力であるから、私を大いに喜ばせてくれた。ちなみに「左指上・左腕上」は（芸術志向）天才肌らしい。レオナルド・ダビンチの指や腕組みを調べるわけには行かないので残念である。私には、単なる右利き・左利きのクセの違いのように思いたくなる。

脳での情報認識（理解）に「総合的理解」と「分析的理解」があり、それらを右脳と左脳と単純化して呼ぶとすれば、みなさまの多くも左の開発は研究で充足されていると思う。一方、右の刺激には、システム工学者：ジェラルド・M・ワインバーグが著した「一般システム思考入門」（紀伊国屋書店、1982年）がすばらしいと思う。この本では、専門的な深い知識と教養をもつ現代人がそれらに支配されず自由で柔軟な洞察力や発想を生み出す思考法を学習することが目的である。同書にある研究課題（例題）の1つを紹介すれば興味を持っていただけたらと思う。

「通勤：バス停でバスを待つとき、乗るバスが来る前に反対方向のバスが先に来ることが多いのは何故だろうか。」「見ているうちはポットは沸騰しない（格言）」を解析せよ。是非、みなさま、紙と鉛筆で「膝を打つ」ようなアハ体験を。